和田定節編輯

開明小說

春雨文庫

第四號上

010190508264
A448
7

松村春輔閲
和田定節編輯

開明小説

春雨文庫

東京書肆 文永堂

48-7537

春雨文庫四編序

父乃恩てゝ春雨文庫ハ松村先生の筆
ゑ出て生ル二蓋三蓋葉を重ね八ヤ
四輯乃愛見を待て彼方中才で葉ハ
ゆ迂浦ゆ殘別れ松先庵時乃書籍お
恵ゝを受る夜ゆ雨ハ四時の常態ゆ

地主
八背

高尾

極ひかく書出す部負〻も代足姉
羽ひてこ保の羽衣小作者が茅ヶ綾錦
硯ヶ源す住吾ハ世ヶ相生ん吋貌を
計ヶ落ぶと共に捨されし老輔

嵐山

丈人が住化の狐薬ヤンヤのお粉と倍
偶ヶ書屋が鼻高ヶ高砂ヶ松の斷ひ

吉野

文永年ヶ堂郎書ヶ花入ヶ丈島屋乃
厨ヶ晩ヶ百部ヶしや年ヶ沢と云
余丁乃百日毎ヶ陰踐去注文

通天

只管堂顧ヶ帝ふと似せ書屋がこと
色迷ひ亭

四治十二年
初夏の日

井住屋のあるじ
桂生述

解やナ紀
こさきの
春の
楽山

横田清兵衛

藝妓小常

春雨文庫第四編巻之上

東京　和田定節著述

第十五回

人の心も和らぎし花の都の繁花の地彼藤村の妾宅の小常が許へ今日もまゝと呑明したる田原屋清兵衛常香を相手にうち戯むれ酒ふうてへるりけり「アヽ清醉ふ今日の様ふ心持よく醉

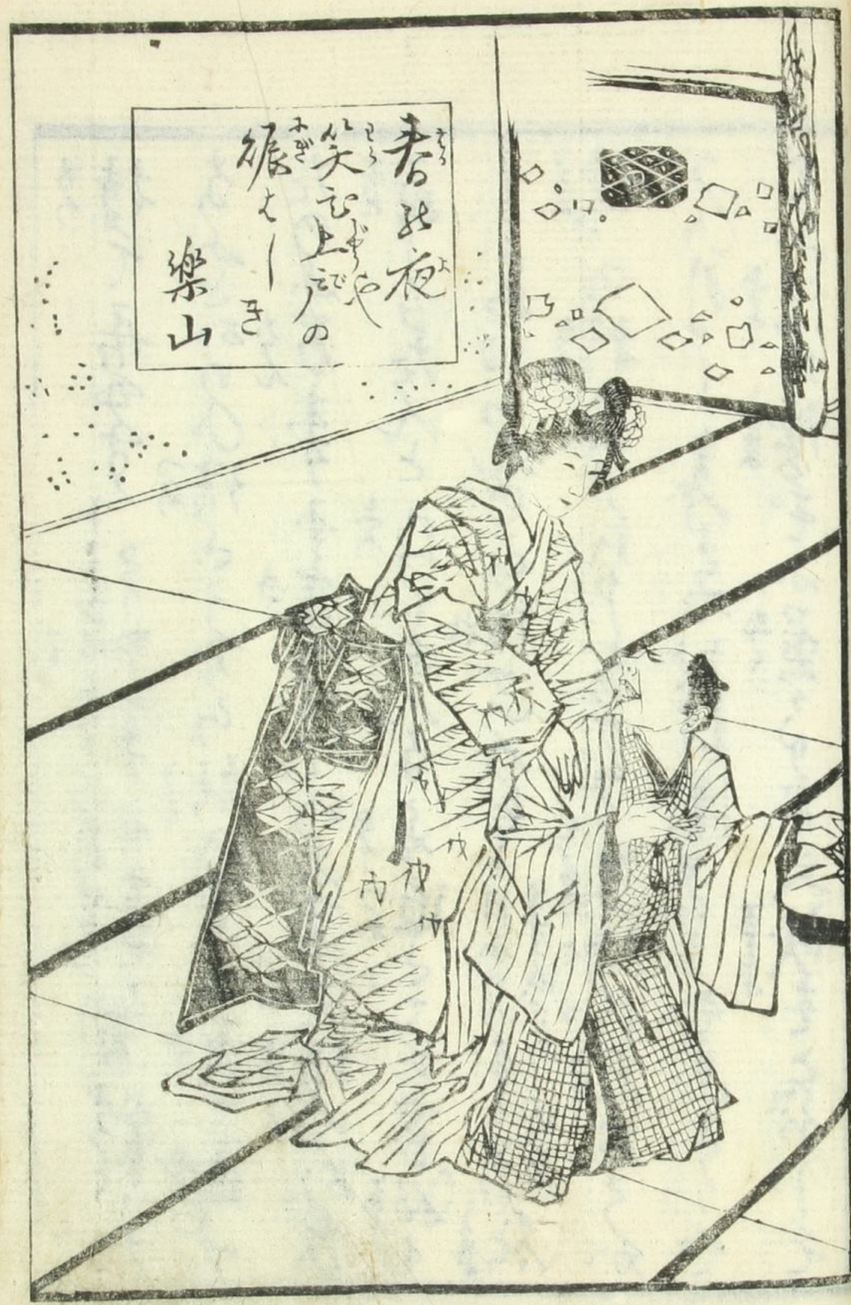
さとい祢へ如何ど小常一ツ相とーく呉ねへろ
「ハイお間を去ませうが其かわり此猪口いさと
いの方へ預ろつて置ますヨ」清「何故ど」「るせし言
て夕夜ろろの呑つでけでつ何程好るお酒でも夫
ドやア身躰ふあとりますうろモウちッと醉と醒
して開してお飯をお食りるたいます」清「ニ飯と食
と情けねへと我いよるア此うへ阪が食れるもの
ろ「お飯が否ろら何でも外よおまれんの好る物

を進申すろろ宜ものとお好をるたいます」清「已い
好るものと言とろ已の好るものるら酒と小常
ど「何ドやいる其酒が悪いおようく余のものと
小常さんがお言のとおヨホ〻「モウく飯い真平ど
何ようろ小常その猪口と鳥渡返して呉ろ「イ〻エ
かへーません是と進ると又お酒を給りますろ
ら「意地のころい女子どナアよく夫るらべ已も
まく和女達の好るものを買て遣ろマア酒を

呑して呉ろヨ「其様ふお言なさるなら隨分お酒と呑して進まるが其替り私しどもの好る者と屹度買てお呉なさるろへ「買てやるとも〳〵」相違るく買て遣るから其猪口をマア此方へ「イヽヱまると何しも極るいうちハ此猪口ハ返しません常香さん何と極さが宜らう祢へ「左様さねへ池洲の會席も芳味るいし「其様るものより何ぞ珍らしいものいるいう祢へ「香夫なら誰ぞ太夫衆と呼んで一段聽が宜らうろ「江戸うろ登つと藝者衆の藝事が面白ひクイヤ夫よりハ四條南の芝居見物が宜でいるいろ「香ヲヽ其事〳〵小常さん夫ふ極るがよいこいる「旦那さん夫ろ〳〵芝居見物を屹度也るし〳〵お呉なさるろへ「清ヒヤア滅法界てと吐出しる宜ハちツと散財ぢが翌日ハ終日見物させやう然し已ハ用事が有て同伴よこ見物ハ出來るいから常香と常鶴と爰のお家さんを誘引合外よ

誰ぞ男と連て行事とするゞよい「嬉しひ」明日い芝居の見僊とせねばならんこいゑ「まゝと餘まりたづんで常香さん俳優ゑ見惚て桟敷の階子と落んやうに考ゑさんせヲホ〳〵「何卒已も早く用事を片付て跡〳〵行て見物しらいゞ芝居よりも此方の狂言どうゝ人目ゑ掛らぬ柘ゑ豆一何さ餘り人の込合ふ中い櫛笄と氣を付ろとゝヨト言紛らせど此頃の世間の噂ゑ違いず

関東方の探索嚴しく既ゑ平野の同銘い諸司代の手ゑ捕縛され猶も同志の殘黨を艸を分て穿議と曼桂村田へ同意せし田原屋清兵衛ゞ家内の様子探索方の付祢へば油断のならぬ時節といひ同銘の士と窃ろゑ量り長州の地へ落行て去むし彼所ゑ身を忍び好機會を得て手術いあゝんと備こそ有志の面々し心を合せて清兵衛も俱ゑ落行く心組小常の好きと幸ひゑ明日


春は夜
笑元上戸の
緋ぢゝき
樂山

の芝居も最愛の名残と惜む別れ路の心だろ
りの賤別と知らぬ小常はいを〳〵「且那夫
でハ毎度ゟ茶屋ハ南の江戸屋でゞいまし
子「清左様と〳〵江戸屋ハ古ひ懇意ゞ故粗末なと
ハ云まひ〳〵江戸やゝ〳〵往がよい己も用事の
暇さへ明ばるゝけ早く行つもりゞ夫〳〵連
てゟく男ハ誰よーたら宜〳〵〳〵る馬幸ハ坐敷
で閑ゲ有まいヲヽ丁度いひ松屋の寅吉を呼よ遣

て連てゟけ「ボンニ噂よ陰と中〳〵今松屋の寅さん
ゲ下坐ーきで声ゲーさ常香さん鳥渡見て来ま
ゟ呉でるいゝ「アイト常香ハ氣も軽く下座敷へと
降て行跡ゟ清兵衛ハ小常ゟ向ひ「清狂言とハゟ者
ハ面白く仕組ゞりもで忠臣藏千本櫻其外世話
もの道行りもと一々よ筋立ハ替れゞ結局ところ
ハ忠信孝貞勸善懲悪を題ゟて人の教へハ早
學問其うちゟゟ天神記の菅丞相道実公勤玉無

二の忠臣も朝廷を軽蔑する佞者の為ふ退けら
れ遂ふ遠流とお成るさまと云心のうちハ何様
よ口惜ひとで有さらう昔も今も世の中ふ兎角
佞人が跋扈して我意の權威と恣まにして勿体
なくも天朝をないがしろにするのをあらず精
忠の勤王者い根を断とらる幕イヤでいるい時平
の壓制虎の威をかる野狐ども憎しとも残念と
も言ふも言れぬ的等寺ゲ我侭夫ふ付ても是迄に
心を尽しく同志を募り古主へ忠告なされしも
却つてお身の害とるり思ひゲけなく捕縛の身
とお成るされと平野様イヤサ道実公土師の里ふ
いお嫗君や。うりやとらん姫もあり翌日い筑紫へ
流罪とるる門出を悲しむ二段目の子別れ場い
和女も定めしうんとであらう丞相程のお方でも
恩愛別離の悲しきい我輩も同ドを仁左エ門ぶ
管丞相で花道の引込いアよろつとぞ〳〵ト夫と言

ねど田原屋ヶ馴染重ねし小常をとゝあ翌日ハ
妻子の憂別れと思へば胸も張裂る涙をかくす
咳ばゝひ折ゝらトン〳〵階子段昇りて爰へ扨屋
常香と倶ふ連立来り寅吉ハ一ト間へ這入「へイ
且那今日ハ只今ふ宅へ参ゞ上ます〳〵さら且那ハ昨
夜ゝ〳〵先斗町ふ居駐輦と羨り直様推参こき
げんを伺ハんと思ふ所へ常香さんゞ何ゝ有難
い居用筋と申ことを注進故早速参ゞ内いとしまし
と例の口〳〵出任せもふ髭の塵と知られけり
清兵衛ハ完ふし「宜所へ来て呉と定めし常香
ふ咲さらゝゞ明日格別用もなければ四條の南
と見物ふ藝子を遣りてへと思ふのゞゞ何分女
子だゝりとふ訳ふも行ハ人〳〵そて貴公と
宰領ふ頼そてへとふのゞ「只今常香さんから
兼ハり委細承知いとしまし〳〵シテ且那ふハ「已ハ
少し用ゞ有て何分繰合せゞ仕ふくひゝ〳〵都合

ろ出来たら跡〳〵でも行てこ仕あらマア兎
も角も万事貴公ふ取扱つて貰ひたへのゞ「寅その其
儀も承知いたしまし〳〵と「寅さんふ頼を申しまし
よ「寅合点〳〵ハテ何事も宜しいのウト似るの「ヲホ〳〵
「夫ハ誰の似声ゞへ「寅誰と言て葉村屋の生うつし
第一声色いともあれ顔ゞ我童延雀と搗交みて
若手の右團次し老功の多見蔵と細末みて衣に
掛とゝふ美男ゞのふ「香「ヲヤ其顔ゞうへ「香「ヲホ〳〵「清

いつも相替らず能元氣で浦山しいナ此頃ハ宜花
主でも足付とう「寅イヱモウふ得意どころでハでさ
いません毎日空然旌んでゞうう居ますゞ然し
其うち又宜支が有ゞらうと思ふのハいよ〳〵「関
東御上洛も近々と決定しさとふ吐しと性ま
たうう夫さへあれゞ隨分まと懐中の工合ゞ替
りまをう今〳〵仕度ゞて置積りでゞざいゝ外
「清そんゞう評判み違ひなくいよ〳〵御上洛み成

のウノ「マア左様いふことでございます」清「ハテナアト何う心ゐ一ト思案幕府が上洛ある時ハ益々群る大小名関東へ荷擔する者多かるべけれども勤王の武士ハ皆深淵ゐ臨むゥ如き時なる故片時も猶豫ハ成がたしと千々ゐ心と痛わらり

第十三回

逢ふとの絶しをぞるゝゐ人とも身とも然ことざらまし一且邊吉太郎ハ江戸へ往きとる戻りが

け生麦の松原にて外國人に捕えられ難儀して居し
お梅を計らず助けしより乳母が家に雨宿りする
幼稚き時の友たると知り互に積る古郷の話しに夜の
雪あらぬ茅ぶ檐端を漏る雨に濡て嬉しき夢の間を
東雲告る鶏鐘の憎きと覚え初れど吉太郎に仕へ
の身故人目を厭えば明ぬうち別れしに立出てその住む
家へ戻りしより斯てお梅に吉田町なる松下亭に居り
渡辺吉太郎に辨天の境内の官宅に在れお勤の暇武

術の誓古の相間ふに松下亭に来り一酌を催し忍び
くにお梅に逢ふお梅にも吉太郎が来るとのを朝
夕待ひて深き中とに成りさるるり然れに
お梅に今日もまた吉太郎が来る為ると二階の手
摺に身を持せ表のかたと見て居ると後方うしろ接足
を徐と来るに此家の酌女お松なり空然して居るお
梅の肩へ「ワッ」と言ひて捕まるとお梅に怕り「オヽ」
誰ぞ彼人肝を潰させてサと振り返り「アレお松ぎん

ぞョ憎らしい覚えてお在松「オホヽヽ夫でもアノ誰やらの
句よ忘れたんと為れで又撞く秋の鐘と言ふのが有さ
が今い春のクアとり〳〵半日ぐらゐ顔を見ないと言
て手摺よ憑れ弁天の方をかり詠て居るこい餘りぐど
と思ふか〳〵生の付く様よ為て上さのぞヲ梅「オヤ私が
何時弁天の方と詠めて居ます〳〵」と言ふ中ふも横
目で東の方へ見當とはけて居るくせよ何時詠めま
しとも云いりんぞ梅「アレまアあれとりのヲ憎らしい昨
日も話す通り亘辺さんい吾伜の手習の相弟子で一ツ
組やーさざから別段ふ心安いンぞと言さら祢へ
松「一ツ手習のお師匠さんざから色のいろはを教え
て お貰ひのぞらう梅「まアあ澤山おんるこを言ておい
ちめお前の事も左様言て居るる〳〵」松「何ぞらう腹
の中でい請賃を出しても恍惚ク言ひさく又言れと
く思つてお在のくせふ偽せ腹を立てさョ誰も居る
いから徐っと彼の人のことを言て上るのふ不知と切

てサ憎らしいねへト言ふ時下を通りかゝる外國人
ぐゝ梅とゝ松とを見て「貴孃好べゝ有りますゝ水姓
ペケ〳〵「オヤあれハ此間來さ百八番の商館のゞ子
梅「何ざゝ吾倆ゝやアまゝゞ皆ゝ同ゝ一ゝうゝ顔ゝえ
えて空然譯らゝいゝ「オヤ〳〵今の異人で思ひ出と
実ハ夫とゝ前さんハ話す積りで二階へ上つて來ゝ
忘れさんざゝ彼のゞそれ生麦でゝ前さんを捕えさ
ト言てゝ話ゝの英の商館のチヤアポンハ夫ッきり

此方へ來ゝいと思つさら軍艦ハ乘りこんで薩ゞ
へ合戦ハ往てゝまつさのゞッさ「オヤまアゝ嬉しい來ら
れたら何樣ゝやうト夫から以來毎日苦労ゝて
居さのゞゝ有り難い福へ「真正ハ薩ゞへ往て豚ハ
食れてゝも仕舞やアゝ宜い彼樣ゝ氣障ゝ異人ハゝ
いのゞゝゞゝゞゝ梅さんの為ハチヤアポン異人大明神
ざゝ「オヤ何故ざゝ「夫でゝも彼の異人のチヤアポンハ捕
えられさゝ且辺さんハゝ逢のゞと言ふでハゝ

梅「アヽ夫れは左様ざが亘辺さんは目は掛つてさつてチヤ
アポン大明神でも無いぢやアるいゝ」松「ゑんはチヤアポン
結ぶの神で有つて祝人」梅「オヤ其様は人といぢあると
兼知れるのいつとお松を捕えんと為るお松は逃る二
階の下り口階子の段と上りて来るを立派な姿の武
士二人お松は其侭腰を屈め「お出遊ばせ此方のお
座敷が宜しうでございますト奥の一ト間へ案内すれ
ばお竹が下から持上る茶煙草盆は敷蒲団漬い

て後から盃洗は徳利盃一二種の座つきの肴も出
ければ二人の客は盃採りお松は酌を為せるがら酒
を飲そゝ話すやう「何と雲田先生方今の模様と
如何思しめす當港なども居ては夫程は存ぜね
ど西京の景況では迚も無事は濟ますまい實は
困つたりのでは坐る「何様畑野君のお見込その
如く騒動が起らずは居りますまい如何となれ
ば世界万國の景勢の往昔と変りしを知らず井

の中の蛙ゐ齊しき諸藩の徒ゞ只我が自國の規則のみを唱え攘夷の鎖港のと騒ぎとて日〻ゐ徒の黨派を集め當横濱港とも襲たんと為るの催し有る程なれお京都の混雑い實ゐお察しまうす相憂らず薩長土がその先達るるりので座いまたゝ一只今のところでい長の勢ひゞ甚ぞ盛んで土人の暴行おきゐみ次ぎ薩人い却て尊大ゐかまゝ未確乎らる色い現いさずと雖も其藩士のうち西郷吉之助中村半次郎らの如きい就中魁首とるり関東を倒さんと為るの始計さゝんの由ゐて九州の諸藩士これゐ煽動され京師ゐ入り込を来り或ひい公卿の従臣を暗殺しまゝい足利將軍の木像の首を斬り制し止めんと為れども暴徒の黨多くして守護職所司代といゝども漫りゐ手を下して是を做し難し因て先刻もお話し申しうる如く蒔田相模守殿と頭として京都見まゝり組と言ふりのと彼の地ゐおき

攘夷鎖港と唱へく世の中と強げに暴行の浪士輩と捕えさせんとす然れども當今み至り剣槍み闌たる士い所々の護備み遣れ明手の者少し只この地の金武場い江戸の講武場み次で剣槍み勝れるものの多しとす因て剣槍の教師み用ゐべきりの七人輩と當港よりして是非とも貰ひ請け京地へ移さねば禁庭の御警備ゞ備たり立ねゝり因て京師へ微すべき人名のうち江戸の講武場み於て牛若御曹子と賞せられる渡辺吉太郎いかねて頭相撲守も講武場み て彼の教授を得して有る故年若くいへども業前み於ていい老練の者も及ばざるを知りなれど是非とも神奈川奉行より貰ひ請け連れ来るべしとて坐るとこの話しゞ此方の坐しきみ居るお梅の耳へ不斗ていりお梅い一日逢ねさへ案じて物の手よ附ず彼処の空のを詠め居ると若も京都へ徴り出され彼の地へお出み成るやうる事み

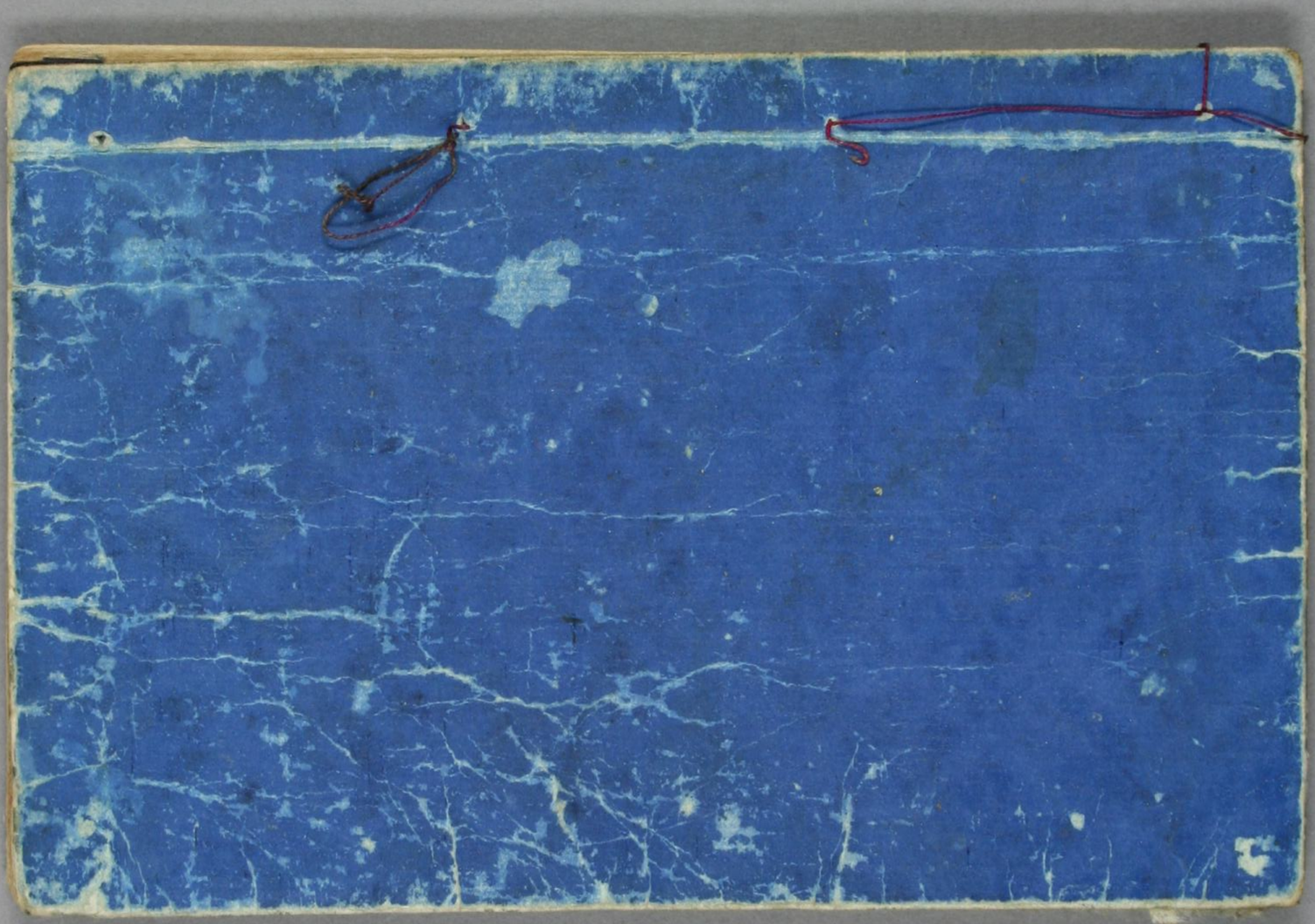
その
そこと
ゆすの
保
ゝ
ぎに
楽山

お梅計ら
ず両士の
その談を
聞く

成さら何様せうト思へど胸まづ裏きてハッと
斗りヨ逆上あゞるゝと息飲を込んゞ落つけて隅
の方へ摺りよりゥ猶その容子を窺ゞへど彼方
の二人いだん〳〵ヨ迫る話しの高調子ニ否畑野君
のあよせでい有れど浮説承知の通り英の軍艦薩
州ヨ迫り彼の藩士と戦争ヨ及ひ〳〵より江戸屋し
きヨ在る薩藩士らゞ當港の異人館を襲ゝんと為
るの風説あるのゝるうず酒井左衛門尉殿へお
預けヨあるり〳〵新微組の浪士らゞ居留地へ乱入し外國
館を討んと為る催しあるゝと現然るれゞ當港ヨても是
を防ぐの備へ最ちう然るゝと折角集ゆ〳〵若者のうち
腕前勝れし分を京師へ抜出されてハ甚ゝ迷ゝく殊ヨ
渡辺吉太郎らハ無て協ちゆゝ當金武場の教授役この
議ハ何分請ひき難し京都を守るも當港を守るも
詰り日本の為徳川家のたゆ急務のかゝと専一とせ
ねゞ成らねゝと存ぜられる「実ヨ浮りゝともゆる

仰せるまでも今日のところで見れば京師の景況い當港の如きものみ非ず既ふ眉毛へ火の附きさるるり天下の為徳川家の為と思召さば曲げて相摸守の意ふ従ひ給へと説れても猶返辞せぬ折から又も一群の客が階子を上り来り隣り座しきへどやく這入れば両上い忽地声と竊め餘の雑談ふぞ移りける此方の一間み身と竊め耳と澄して聴き居しお梅い帯ふ狭そうる手ふ胸さきの痛そと押へ袗ふ顔さし入れて

哼と溜息吐ふゞ「渡辺さんが今日い一度もおええのそのでお招ーさと案ドられ煎餅の中の辻占を取て見そう逢ひ見ての後の心ふそうぶれば往昔い物を思いざりりと言ふ百人首の歌が出てゐんみ子安村で渡辺さんの乳母とやらの家へ降り込あられ婚しい姿とお見ての恪のけふ日ふ比較れば遇ね往事い楽しそもそうつさけまど物思ふことも是ずどみいそうつさを苛いさい世の中さと思つさい戀する身みい誰しも同しんの

勝手で宜く當て辻占と感心して居さが先刻の當つさと思ふさい嘘のさきの物おことひが湧て出るの我知らせさ辻うら夫ゑ附ても渡辺さんゑ遇ひたいもの今の話しの容子でい渡辺さんと撰り人ぐ京都へ連て往き剣術の教授かさゑ為やうと言ふので有らう撰られる程の人と彼様し さ中ゑ成さい真事ゑ嬉しいが藝と言ひ氣立と言ひ男振りと言ひ吾侭が好で他も好く上方の女ハ男と扱ふ上手とみれで京都へおいでの様ゑ成たら何様ぢやう無暗ゑ附て往うう否い外聞ゑ成る様ゑとが有つてハ悪いハテ何様ぢさら宜らうト思案ゑ眉を痛むるとうう下でお松が大聲さて「お梅さんお梅さァんー

春雨文庫四編巻之上終